

尿崩症を呈した胃癌の下垂体後葉および 漏斗部への転移 (一剖検例)

金沢大学医学部第二病理学教室 (主任: 石川太刀雄教授)

武川 昭 男
安念 有 声

金沢大学結核研究所臨床部 (主任: 水上哲次教授)

上原 時 雄
林 征 一 郎
岡田 良 康

(受付: 昭和40年6月16日)

われわれは最近、胃癌の症例において尿崩症を呈し、剖検により、下垂体後葉および漏斗部への転移を確かめた一例を経験したので報告する。本例はそのほか、その末期において、胃癌

の十二指腸乳頭部への浸潤により、肝外胆道閉塞性黄疸を呈したが、漏斗部小転移巣の周囲にも、明らかな黄疸が認められ、脳の黄疸発生の問題にも関連する症例である。

臨床所見

症例 54歳の男子

家族歴に特記事項はない。昭和39年6月急性虫垂炎で、虫垂切除術を受けた。

現病歴 昭和39年10月頃より、上腹部痛および強い口渴をおぼえ、一日に4~5lの水を飲用していたという。その後次第に腹部膨満感と胸やけが加わり、3~4kgの体重減少を認めた。昭和39年11月30日金沢大学結核研究所付属病院に入院。X線透視により、十二指腸窓の開大、十二指腸の狭小および通過障害を認め、十二指腸窓の上縁から幽門部大彎側に向け、鶏卵大でわずかに移動性ある腫瘤を触れた。同年12月11日にGOF全身麻酔の下に開腹した。手術所見は、主として胃幽門部より十二指腸起始部に達する鶏卵大の腫瘤があって、かつ、臍頭部に手拳大の腫瘍性浸潤を認め、更に一部は下空大静

脈壁と密に癒着していた。また、腸間膜根部には小指頭大ないし示指頭大に腫大したリンパ腺も認められた。胆のうは中等度に膨満していた。根治手術不能のため、結腸前胃空腸吻合術および Braun 氏吻合を施行するとどめた。臨床診断は、胃癌および臍頭部癌浸潤である。術後7日目に黄疸が発現し、以後黄疸は徐々に増強して、昭和40年1月17日、すなわち術後37日目の測定では、Meulengracht 指数は240に達した。昭和39年12月30日より腹水貯留を認め、昭和40年1月14日に放射性金コロイド 60 mc が腹腔内に投与された。1月17日より意識混濁を示し、血圧下降して翌18日に死亡した。入院後の尿量は、一日1.4lから3lを上下し、多くは2.2l前後で、尿比重は最高1.030、最低1.010であった。

病理解剖学的所見

剖検番号 4486。9時間後剖検。剖検者: 武川
肉眼所見 (抜萃): 上腹部の局所所見は、胃

幽門部後壁寄りから幽門輪を越えて、十二指腸乳頭部に及ぶ粘膜炎に、中央部潰瘍性で辺縁隆起

した腫瘍があり, それは胃および十二指腸の該部壁全層を侵し, 連続的に臍頭部にも浸潤を示していた. 幽門輪直後の十二指腸起始部に, 腫瘍の自潰によると思われる小穿孔があり, これを覆って, 漿膜側に被覆化された膿瘍がある. 肝門部の淋巴腺に明らかな腫瘍の転移があり, 門脈は腫瘍の浸潤を受け, 内腔に腫瘍塊が露出している. 腹水は約 11 である. 傍気管淋巴腺は左右ともに腫瘍の転移を認め, 右肺上葉後節の傍気管支に小転移巣を認める. 肝, 腎等は皮膚と同様強い黄疸色を呈する. 脳は重量 1450 gm で, その未固定脳の前額断面上, 漏斗部に最大径約 1 cm の小出血巣を伴う不整形灰白色腫瘍があり, その周囲脳組織は, 明らかな黄疸色を呈する. 脳下垂体は, 大きさ, 形に異常なく, 下垂体窩に異常を認めなかった.

顕微鏡所見: 腫瘍は, 胃腺原発の癌であって, 図 1 に示すごとく, 原発巣の一部では, 立方形で小型の癌細胞が小腺腔を形成する腺癌の形態をとるが, その他の大部分は, 転移巣も含めて小型の細胞よりなる髄様配列を示し, その一部は印環細胞化を呈する. 全般に腫瘍は, 間質性の細胞反応ないし周囲組織の瘢痕性硬化を

ほとんど伴わず, これに反して, 壊死と淋巴管ないし門脈系の静脈内に浸潤する傾向が強い. 漏斗部の小腫瘍も同様な所見を示している (図 2). 特記すべきは, 脳下垂体の組織像で, 図 3 および図 4 に示すように, その後葉のほとんど全体が同様な転移癌で置換され, その被膜および下垂体柄も腫瘍の浸潤を示して, 漏斗部腫瘍との連続を強く暗示する. 一方前葉は, 腫瘍の浸潤を全く受けていない. 肉眼上漏斗部に認められた黄疸色は, ヘモンデリンの沈着によるものでないことを特殊染色により確かめた. なお, 肝に軽度の慢性非特異性細胆管周囲炎の像があり, 上行性炎症を暗示する. 肝における胆汁の貯留は, 主として肝小葉の傍中心部に強く, 肝外性胆道閉塞型である. 腎は左右とも重量 180 gm で胆汁のうっ滞を示すのみで, 腎上皮のごく一部に胆汁色素の沈着と, 胞体の膨化を呈したものがあ以外に著変はない. 右肺上葉後節の転移は, 傍気管支淋巴装置への転移像であった. 睪丸細精管は, 年齢に比し萎縮像強く精子形成像は見られない. その他の諸臓器に特記すべき所見はない.

考 案

本例における脳下垂体後葉から漏斗にかけての癌転移は, 内頸動脈を経ての同部への動脈血行性と考えるのが最も妥当であるが, 肝に転移巣が認められないことから, 腫瘍細胞が胃の周辺より該部動脈に至るためには, 胸管ないし右側淋巴管を通るか, あるいは, Batson の vertebral vein system すなわち, この際は, 縦隔静脈を経なければならない. 縦隔の淋巴腺が本例において転移を示していたことは, この考えを支持する. しかし直接には, これらの淋巴管ないし静脈内の腫瘍細胞は検索されておらない. また, 肺の血管系内に, 検索した範囲では腫瘍を認めないが, このことは, 上記の転移型式を否定することにはならない. 本例において, 上腹部の手術が行われる以前に, 下垂体後葉ないし漏斗にすでに転移が起っていたであ

うことは, 病歴よりほぼ確かであるから, 手術侵襲の血管破壊による該部への転移は考え難い.

脳下垂体前葉と後葉とに分布する動脈系に, その内径ないし構造上差異がないとすれば, なぜ, 後葉のみが, しかも広範囲に転移を受けているのに, 前葉は転移をまぬがれたのであろうか. 下垂体中, Pars distalis は静脈血の供給を受けているが, 該部は前葉に属し, この際問題にならない. Willis の成書¹⁾によれば, 多数の著者が, 下垂体への転移を記載しているが, Willis 自身の気管支癌からの一例を除き, すべての例は後葉および柄のみが侵され, 前葉は侵されていない. Willis の一例も, 後葉の大部分が侵され, それが一部前葉へ及んでいる像である. これらの報告例の原発巣は, 乳腺, 肺, 臍, 甲状

腺，前立腺等の癌であって，本例のような胃癌の例は記載されておらない。なお，上記の例では，下垂体は肉眼的にその大きさ，形等に著変がなく，顕微鏡的検索を待って始めて転移の存在を認めた例が多いと記載されているが，本例もこの記載に合致する。これらの例の臨床症状は，大部分多尿と口渴を主徴とする尿崩症で，まれに尿糖や肥満症を伴っている。下垂体後葉に侵襲を受けていなくても，視床下部へのみの転移巣により，尿崩症が起った例の記載²⁾があり，本例においても，漏斗部が先に転移を受けたか，あるいは，あとに侵襲されたかは決定できないが，いずれにせよ，尿崩症は起り得たと考えられる。

本例において，黄疸による肝腎症候群が起っ

ていなかったことは組織像より明らかで，多尿の原因を直接腎に求めることはできない。脳組織内での黄疸は，新生児の核黄疸等，blood-brain barrier の未完成な新生児以外では，まれであるが，本質的には，該 barrier が破壊されれば，新生児以外でも起り得ると考えられるので，本例における漏斗部転移巣周囲の明らかな黄疸も，局所の腫瘍による該 barrier の損傷の結果と推定できる。

終りに，御校閲を戴きました恩師石川教授及び水上教授に深甚なる謝意を表します。尚，顕微鏡写真は金沢大学写真部神戸竜雄氏の撮影によるもの，組織標本は，第二病理学教室の川筋繁俊氏の作製によるものである。記して感謝します。

文

- 1) Willis, R. A. : The spread of tumours in the human body, p. 294, Butterworth

献

- & Co., London, 1952.
- 2) *ibid.* p. 295. 1952.

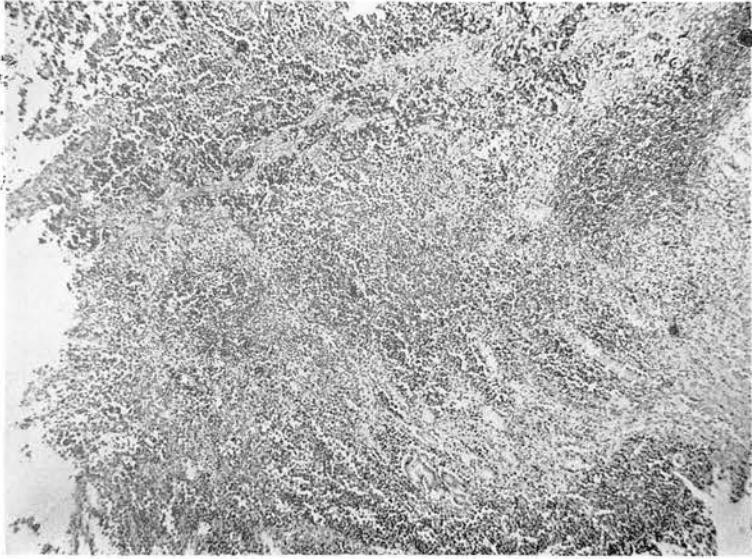


Fig. 1. Photomicrograph of carcinoma of stomach.

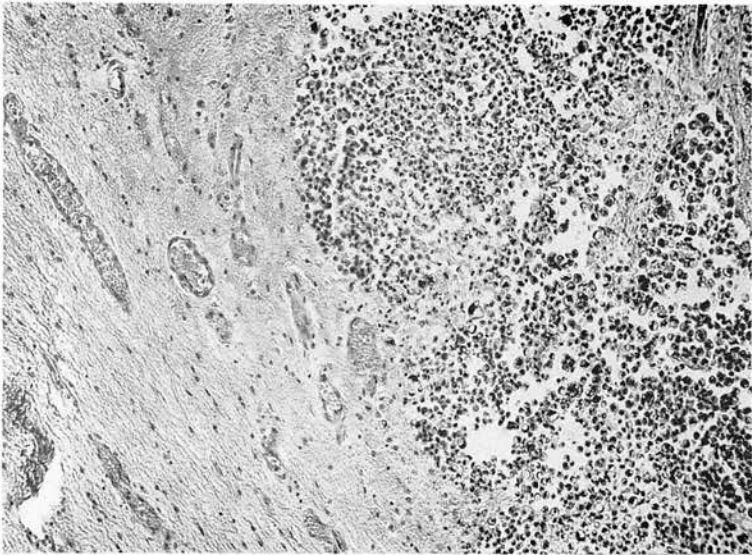


Fig. 2. Metastatic carcinoma of infundibulum.
Some of the tumor cells are of signet-ring type.

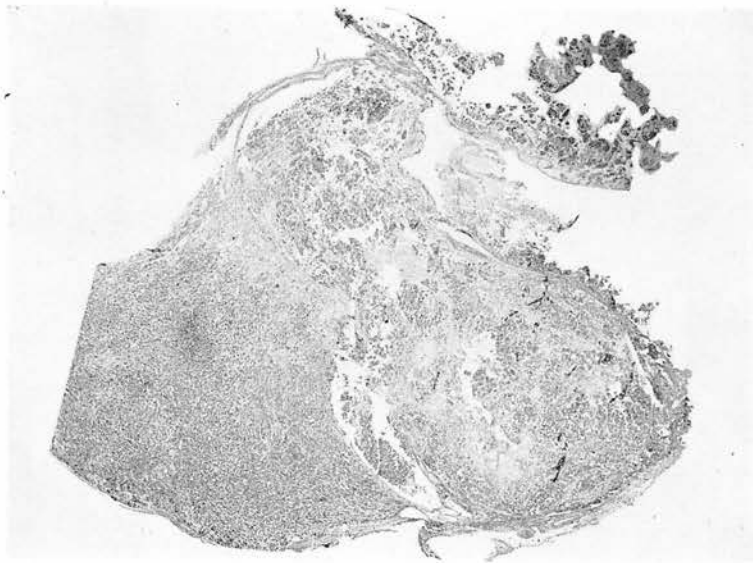


Fig. 3. Low power view of pituitary and stalk. Note the sharp delimitation of the metastatic tumor in the posterior lobe at the right side and in the stalk.

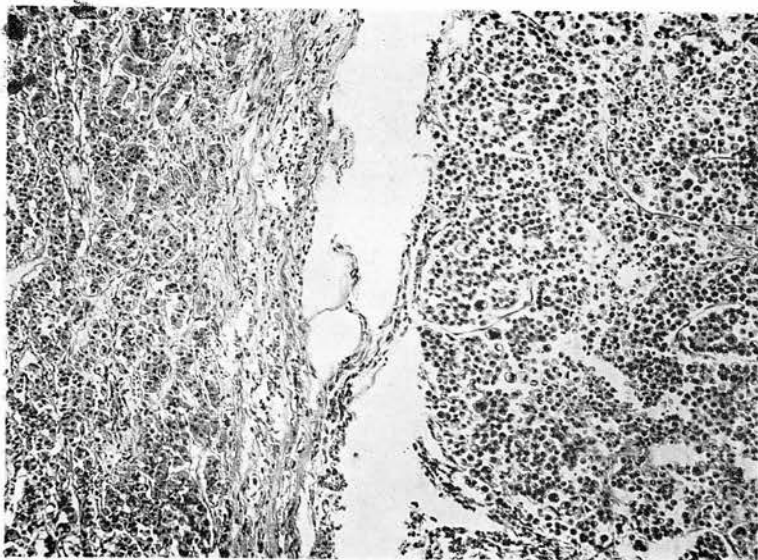


Fig. 4. Higher magnification of the pituitary. The right side is the posterior lobe and the left anterior lobe.

人 事 異 動

研 究 生 入 学 退 学

昭 和 39 年

月 日	入学、退学 退科の別	部 局 名	摘 要	氏 名
1. 7	退 所	薬 理 部		村 上 徳 雄
1. 19	“	細 菌 免 疫 部		柳 碩 也
4. 1	入 所	臨 床 部		長 治 達 雄
4. 20	退 所	細 菌 免 疫 部		横 井 健
5. 1	入 所	臨 床 部		西 島 啓 輔
“	“	“		松 本 裕 史
5. 10	退 所	薬 理 部		山 崎 隆 吉
9. 1	“	“		沼 田 直 吉
11. 1	“	薬 理 部		細 川 孝 一
11. 2	入 所	病 態 生 理 部		奥 村 次 郎
12. 7	退 所	薬 理 部		川 尻 清

昭 和 40 年

月 日	入学、退学 退科の別	部 局 名	摘 要	氏 名
3. 31	退 所	臨 床 部		長 治 達 雄

副 手 (無給)

昭 和 40 年

月 日	異 動 事 項	部 局 名	摘 要	氏 名
4. 1	委 嘱	臨 床 部	昭. 41. 3. 31迄	長 治 達 雄

職 員

昭 和 39 年

月 日	異動事項	摘 要	官 職	氏 名
1. 1	採 用		文 部 教 官	岡 田 良 康
2. 29	辞 職		"	岩 倉 衛
3. 15	"		技 能 員	東 山 美 智 子
3. 31	退 職	金沢大学医学部付属病院へ	技 能 補 佐 員	瀬 戸 久 美 子
"	辞 職		用 務 員	水 上 イ サ
"	"		文 部 教 官	蕪 城 外 枝 子
4. 1	併 任	金沢大学結核研究所付属病院長(昭41. 3. 31迄)	"	水 上 哲 次 子
"	採 用	金沢大学医学部発令(化学部)	"	水 上 哲 次 子
"	"		"	谷 康 子
"	"		"	荒 川 弥 子
"	配 置 換	金沢大学結核研究所付属病院診療事務係長へ	文 部 事 務 官	高 島 貞 一
"	"	金沢大学結核研究所付属病院診療事務係へ	"	今 井 武 子
"	"	"	"	田 中 百 合 子
"	"	"	"	本 保 哲 夫 子
"	"	"	事 務 員	二 口 幸 子
"	"	"	用 務 員	大 橋 一 二 子
"	"	"	"	山 田 清 二 子
"	"	"	"	田 中 孝 二 子
"	"	金沢大学結核研究所付属病院薬局主任へ	文 部 技 官	大 滝 武 雄 子
"	"	金沢大学結核研究所付属病院薬局へ	事 務 員	西 川 久 枝 子
"	"	金沢大学結核研究所付属病院看護婦長へ	文 部 技 官	黒 田 浜 子
"	"	金沢大学結核研究所付属病院看護主任へ	"	和 泉 愛 子
"	"	金沢大学結核研究所付属病院へ	"	米 村 み どり 子
"	"	"	"	金 森 ち ゑ 子
"	"	"	"	南 昭 代 子
"	"	"	"	丹 保 千 代 子
"	"	"	"	本 田 の ぶ 子
"	"	"	"	尾 崎 幸 子
"	"	"	"	高 瀬 つ や 子
"	"	"	技 術 員	福 井 京 子 子
"	"	"	"	伊 勢 笑 子 子
"	"	"	技 能 員	中 山 タ ミ 子 子
"	"	"	"	津 幡 豊 子 子
"	"	"	文 部 技 官	福 田 英 雄 彬 子
"	"	"	"	西 家 倜 彬 子
"	"	金沢大学結核研究所付属病院診療事務係へ	"	近 村 惟 正 子
"	"	"	技 能 員	伊 藤 与 三 郎 子
"	"	"	技 術 員	早 瀬 昭 乃 子
4. 16	改 姓	佐藤	技 術 員	早 瀬 昭 乃 子
5. 1	採 用		文 部 教 官	松 本 吉 典 子
"	"		技 能 員	邑 本 万 里 子
"	"		臨 時 用 務 員	武 田 市 太 郎 子
7. 1	併 任	所長	文 部 教 官	石 崎 有 信 子
"	配 置 換	金沢大学理学部より	文 部 技 官	石 橋 二 三 子

"	併任		文部	教	官	岡本肇
"	任官		文	部	事務	二口幸子
"	"		"	"	"	盛一紀子
"	"		文	部	技	谷川弘子
"	"		"	"	"	福井京子
"	"		"	"	"	伊勢笑子
"	"		"	"	"	伊藤与三郎
8. 1		主任看護婦	"	"	"	石橋二三子
8. 31	採用		技	能	員	藪下喜久代
"	"		用	務	員	増村芳子
9. 1	配置換	金沢大学医学部付属病院業務課調理係長へ	文	部	事務	千田統三郎
"	"	金沢大学教育学部付属学校会計係へ	"	"	"	本保哲夫
"	"	金沢大学医学部付属病院業務課調理係長より	"	"	"	熊谷俊夫
"	"	金沢大学医学部付属病院業務課保健係より	"	"	"	森長保子
9. 1	採用		事	務	補	小川和子
"	"		技	能	員	荒間頼子
9. 2	辞職		文	部	技	石橋二三子
9. 10	"		技	術	員	佐藤昭乃
9. 11	配置換	行政職より医療職へ	"	"	"	藪下喜久代
9. 30	退職		臨	時	用	武田市太郎
10. 1	配置換	金沢大学法文学部へ	文	部	事務	盛一紀子
"	"	金沢大学結核研究所臨床部へ	事	務	員	岩鍛治京子
10. 8	採用		臨	時	用	武田市太郎
10. 16	転任	通産省工業技術院電気試験所金沢支所業務課より	文	部	事務	野口良雄
10. 31	辞職		文	部	技	高瀬つや子
11. 1	併任	昭41. 10. 31迄	文	部	教	卜部美代志
11. 17	辞職		文	部	技	尾崎幸子
11. 30	退職		事	務	補	小川和子
12. 1	配置換	金沢大学結核研究所付属病院へ	事	務	員	岩鍛治京子
"	"	"	技	能	員	吉野愛子
"	"	"	事	務	員	高橋妙子
12. 7	採用		事	務	補	小川和子
12. 31	辞職		事	務	員	西川久枝

昭和 40 年

月日	異動事項	摘	要	官	職	氏	名
1. 1	採用			技	術	荒納久美子	子
2. 28	退職			文	部	田中百合子	子
3. 7	"			臨	時	武田市太郎	郎
3. 31	"			事	務	小川和子	子